毎月、各選者の選歌後の全詠草に目を通す。ほぼ二日がかりの仕事だ。最近はワープロの投稿も多いが、それでもまだ、手書きの歌稿の方が多い。手書きの歌稿は、作者名を見なくても誰の歌稿か私にはすぐに分かる。

詠み人の伝はらぬ歌読みゐつつ詠みて消えにし生の
ゆかしさ　　白岩裕子

作者の名前は消えて作品だけが残った。作品がある以上作者がいたことは確かだが、誰が作者なのか分からない。そういう作者に対する共感である。俳句の飯田龍太さんが、「名句は個性を超えたところに位置する」と言い、俳句には作者名がいらないと言っていたのを思い出した。

亡き人も映し出されて披露宴に過去の時間が流れる
暫し　　今井洋子

「亡き人も映し出されて……過去の時間が流れる」と、太い文脈が通っているために、一首の輪郭が太い線で縁取られたような、すっきりした姿の歌に仕上がっている。欲を言えば「暫し」を外す工夫が欲しかった。

やわらかな羽ふくらませ雌雉は一歩を前に一歩を前
に　　越智敦子

下句、共感というか作者の心が雌雉の一歩一歩にのめり込んで応援している感じに心ひかれる。何十秒か見つめていたのだ。雄雉は目立つが、雌雉は地味な姿。そんな外見とも関係があるのだろう。

短歌の現在

No.378　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

逃亡者ゆゑの心の充実に少し焦がれて見てゐる写
真　　高山邦男

過日、逮捕されたオウムの指名手配犯・高橋克也、菊地直子。彼らの十七年間の心のありようによって、われわれの日々の生活がいかに充実していないかが反照される、というのである。私も似たような感想をもった。共感する人も多いのではないか。

ポスターのジャッキー・チェンとにらみ合うＤＶＤ
コーナー間合いを計り　　佐佐木定綱

前の作と同じく、日常生活の非充実ぶりをうたうが、こちらは戯画化して表現している。写真とにらみ合う馬鹿な男がクローズアップされることで、影のうすい日常が浮かびあがる。

川風は湿りを運び揺れながら遅い日暮れを待つ鵜飼
舟　　細溝洋子

客を乗せて、かがり火が映える暗さになるのを待っている場面だろう。船頭は毎日のことだからどうということもないが。客は、期待いっぱいの分だけ待ちくたびれて、退屈な手持ちぶさたな時間をすごしている。上句、蒸し暑い日暮れの感じが、みごとに表現されている。

生き生きと遠ざかり行く台風の映像の雲見ていたり
ける　　梶尾利徳

まだまだ元気のいい台風の進路を、高見の見物状態で見ている場面。「生き生きと遠ざかりゆく」が、もう心配しなくていいほっとした気分を表現していて。的確。